

魔法の Wallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 山崎 浩二(森 万喜子)

記録日: 令和2年2月19日

所属: 北海道小樽市立朝里中学校

キーワード: 表現、読み書き支援、コミュニケーション、作文

【対象生徒の情報】

・学 年 中学3年生(知的・特別支援学級在籍) 男子

・障害名 知的障がい 広汎性発達障害

・障害と困難の内容

- ①朝の会、帰りの会、学校行事、音楽、体育の授業は交流で参加している。
- ②漢字の読み書きが得意。小学校高学年の漢字を学習している。
- ③これまでの経験や知識を用いて、試行錯誤しながら解決することが苦手。やり方や例を知り、そこから積み重ねて自分の力にする学びが適している。
- ④言葉だけでなく視覚も提示したほうが情報を理解しやすい。
- ⑤やり方が決まったものを繰り返し学習することが得意。
- ⑥読み書きで、助詞の使い方を間違えることがある。
- ⑦作文では、何をどのように書いていいのかわからなくなる。
- ⑧人と関わることは好き。相手から話しかけられると受け答えはできるが、自分から相手に話しかけることを苦手としている。
- ⑨本人の訴えから、生活の中で「人の前だとうまく話すことができない」ことが一番の困りだと訴えがある。話す場で「何を」「どのように」話していいのかわからなくなる。

対象生徒の困り感が強い⑥、⑦、⑧、⑨の改善に向けて学習目標を設定した。

【活動目的】

・当初のねらい(計画書の学習目標)と活動による方向性の確認状況

(1) 当初の学習目標

- ①自分が他の人に伝えたいことを整理できるようになる。
- ②整理したことを元に、文章を作ることができるようになる。
- ③整理したことを元に、定型を活かして人の前で話すことができるようになる。

(2) 実施期間

- ・令和元年5月30日～令和2年1月31日
 - ・授業では教室で週1回、50分間実施、土日は家庭で実施。
 - ・夏休み中は15回、家庭で実施。
 - ・冬休み中は5回、家庭で実施。

(3) 実施者

山崎浩二

(4) 実施者と対象児の関係

学級担任

【活動内容と対象生徒の変化】

対象生徒の事前の状況

(1) 書く場面

学校行事が終わった後に感想などを作文として書く時に、対象生徒が作文を書くことができない場面があった。出来事について生徒に聞いてみると、記憶があいまいな時があった。また、教師と生徒が話をして出来事を思い出すことができて、文を書こうとすると何をどのように書いていいのかわからない姿が見られた。さらに、生徒が書いた文を見ると、言葉、促音、長音、助詞に間違いがあったため、生徒自身に文を読んでもらい間違いに気づくかどうかを確認したところ、間違いに気づくことができなかったが、教師が声に出して文を読むと、間違いに気づくことができた。この様子から、「出来事を記憶として思い出すための手段」や「作文を書く時に何をどのように書けばいいのかわかる定型」、「文を音声として聞いて間違いに気づき、自分で修正するための手段」があれば、書くことへの困難が少なくなるのではないかと考えた。

(2) 話す場面

先生や仲間に自分から話しかけることは少ない。相手に話しかけられると応答するが、相手の質問に答えることができない場面が多々あった。会話の中で生徒が応答に困っている場面で、生徒に相手の質問内容を確認すると、質問を聞いただけでは何を聞かれているのかわからないという返答があった。この様子から、「相手の質問に対する答え方を理解」するとともに、「相手の質問内容を可視化する手段」があれば、話すことへの困難が少なくなるのではないかと考えた。

活動の具体的内容【書く場面の改善 その1】～思い出す・作文を書く

(1) 活動がターゲットとする目標

- ・自分が他の人に伝えたいことを整理できるようになる。

(2) 具体的な内容

① 伝えたいことの元となる出来事を選択(写真カレンダーアプリの活用: Photo Memes)

- ・生徒本人が撮った写真から選択

② 教師とともに話をするときの定型に沿って伝えたいことを整理する作る学習

- ・定型に沿って紙のカードに自分が伝えたいことを書く。 ・カードを並べ替え、伝えたいことを整理する。
- ・並べ替えたカードを写真に撮り、可視化をし、記録する。



対象児の事後の変化【書く場面の改善 その1】～思い出す・作文を書く

(1) 写真を見て、自分が書きたいことを定型に沿って紙に書く。

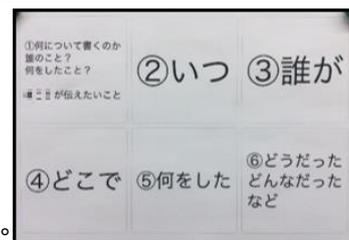
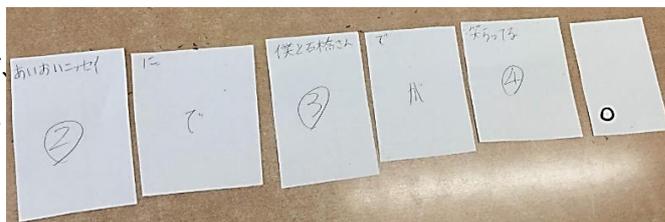
○ 5月30日、この取り組みを始めて行った時の写真

教室のホワイトボードに、①いつ、②どこで、③誰が、④何をした、をカードに書くことを明記してから取り組みを始めた。生徒と会話をしながら書いたものが右の写真である。5月の修学旅行で東京にある、あいおいニッセイ同和損保株式会社を訪問し、パラアスリートの方と交流した時の写真を見て書いた文である。

「あいおいニッセイに僕と石橋さんと笑らってる。」

→「あいおいニッセイで僕と石橋さんが笑らってる。」

○ 6月5日、考えることと書く順番を1枚のシートで提示し、それを見てカードに書く。



6月に、小樽高等支援学校の学校説明会に参加したことを、教員と話をして思い出しながら書く。写真は見ていない。

「昨日、僕が小樽高等支援学校の木工科で系のこぎりを使って木を切った。へんな形になった。」

↓ 「どうして変な形になったの？」と質問してみると・・・

「昨日、僕が小樽高等支援学校の木工科で系のこぎりを使って木を切った。音が気になってよそみをしたから変な形になった。」 生徒が考えた言葉が増えた。

(2) この活動の分析 ～ ① 思い出す ② 作文を書く

① 写真など視覚に訴える情報を活用することで、生徒が過去のことを思い出して作文を書くことができるのではないかと考え、写真カレンダーアプリ(Photo Memes)を活用したが、生徒から多くの情報は出てこなかった。また、視覚に訴える情報がなくても、生徒が実際に体験したことであれば、自分の力で想起することができた。

→ 写真カレンダーアプリ(Photo Memes)の活用を中止。

② 取り組み当初、紙のカードに生徒が伝えたいことを書いていたが、生徒自身が文としてのつながりを考えることが難しいように見えた。そこで、考えることと書く順番を1枚のシートで提示したところ、カードに自分の書きたいことを比較的スムーズに書くことができた。

→ 考えることと書く順番を提示したシートに言葉を書き込めるようにした。



活動の具体的内容【書く場面の改善 その2】～作文を書く・間違いを修正する

(1) 活動がターゲットとする目標

- ・自分が他の人に伝えたいことを整理できるようになる。
- ・整理したことを元に、文章を作ることができるようになる。

(2) 具体的な内容

- ① 生徒が実際に行ったことを思い出し、他の人に伝えることができるように、プリントを使って内容を書き出す。
- ② iPad mini で音声読み上げアプリ(PeraPeraPaper)を使い、プリントに書いたことを入力し、書いた内容や言葉に間違いがないかを音声で確認する。間違いがあった場合には、赤ペンで修正する。
- ③ 間違いを修正したものを、再び入力し、音声で聞いてみる。
- ④ 生徒が書いた文を見て質問し、その答えをプリントに書き、アプリにも入力して、聞いてみる。



対象児の事後の変化【書く場面の改善 その2】～作文を書く・間違いを修正する

(1) 【作文を書く】～文章の変化

① 6月途中から、考えることと書く順番を提示したシートを活用し始めた。まだ、この時点では今使っているシートにはなっていない。

6月の様子

生徒が書いた文章に対して、教師と生徒で質問を考えて、内容を膨らませている。

①書きたいこと・やったこと	①いつ	②誰が	③どこで
④何をした たうはがたかをした 走高跳びをした。	⑤どうだった どんだった なんでそうなった 高さが怖かった 何の言文でか?	⑥棒をたおした どうなた棒をたおしたのか?	⑥友達の見てうまいな とあました あました
⑥	⑥棒の高さが怖くて できなかつたです。	⑥友達が棒をたおした たがうたあしました。	⑥友達の見て自分もう まくなりたかったです。

↓ 生徒が音声読み上げアプリ(PeraPeraPaper)に入力した文章

今日、僕が体育館で走り高跳びをした。棒の高さが怖くてできなかったです。友達が棒を倒したから直しました。友達のを見てうまいなと思った。友達のを見て自分もうまくなりたかったです。

①書きたいこと・やったこと 岩見沢の大会にでたこと	①いつ 昨日	②誰が 僕が	③どこ 岩見沢総合体育館
④何をした 試合をしました。	④何をした 僕の試合をしました。	④何をした 決勝戦を戦いました。	④何をした 試合終了に行きました。
⑤どうだった どんなだった その時の気持ち 思い浮かんだこと など たくさん書いてみよう 弟の試合があった。強いやつと あたりました。負けました。 2回戦相手、背が低くて おきました。	⑤どうだった どんなだった その時の気持ち 思い浮かんだこと など たくさん書いてみよう 1回戦目は、重量級の人に あたりました。パンチが強く、 痛かったです。でも前蹴りで おりました。引き分け でも一回戦おきました。 次は、上段の蹴りで技あり をおきました。勝ちました。 勝ちました。皆泣いていました。	⑤どうだった どんなだった その時の気持ち 思い浮かんだこと など たくさん書いてみよう 相手は、強くて下がりました。 蹴りが入りました。 くわいかったです。 練習を省けておきました。 空手の先輩から援をた さんしていただきました。嬉しく 笑って、理長、たね といわれました。	⑤どうだった どんなだった その時の気持ち 思い浮かんだこと など たくさん書いてみよう 準優勝をしたのは誕生日だ からお肉を食べました。 おいしかったです。 皆といっしょにご飯を食べ たのがおいしかったです。 準優勝がおいしかったです。

11月の様子

9月より用紙をA4からA3に変更した。

小学6年生からやっている空手の大会について書いた文章。応援の人がなぜ泣いたのかを聞くと、相手の気持ちを考えて、その答えを話すことができた。

11月18日、昨日、僕が、岩見沢総合体育館で試合をしました。午前中に弟の試合があって強いやつと当たりました。負けました。2回戦目は背がでかくて負けました。僕の試合をしました。1回戦目は、重量級の人に当たりました。パンチが強くていたかったです。でも、前蹴りで頑張りました。引き分けでも1回戦おきました。次は、上段の蹴りで技ありを取れました。勝ちました。みんなが泣いている姿を見て、最初は緊張したけど、嬉しくて泣いたのがわかって、嬉しくなりました。決勝戦を戦いました。相手は、強くて下がりました。疲れて戦えなかったです。悔しかったです。練習を皆やってくれました。空手の人たちが応援してくれました。うれしかったです。笑顔で頑張ったねと言ってくれました。スタミナ太郎に行きました。準優勝だったの誕生日だったのでお肉を食べました。美味しかったです。みんなと一緒にご飯を食べたのが嬉しかったです。準優勝が嬉しかったです。

(2)【作文を書く】～ 変化の要因

- ・文を書くものをカードからシートに切り替えたことで、生徒が「何を、どのように、どの順番で」書けばいいのかが理解できた。
- ・1枚の紙に書くので、文全体の構成を目で見確認することができるようになった。
- ・取り組みをやる中で、生徒が「これも書いていいんだ」とつぶやく場面があった。生徒自身がこの取り組みを通じて、自分が考えていることを表現しても大丈夫だということを理解した。
- ・この取り組みを積み重ねることで、正しい言葉を書くことができるようになり、自分が体験したことや思ったことを表現することに自信がついてきた。
- ・9月からシートを大きくしたことで、これまで以上に自分か感じたことや体験したことを書くことができるようになった。

(3)【間違いを修正する】～ 言葉、促音、長音、助詞の変化

・7月に書いた文から

「今日、僕が料理でカルボナーラを作りました。初めにラビッシュの葉っぱを切りました。次にめんをゆでました。ベーコンを細かく切りました。チーズと生クリームとおぼんに入れて混ぜました。カルボナーラがおいしかったです。」

間違いの修正

- ①自分で文章を声に出して読むが、間違いには気づかない。
- ②音声読み上げアプリ(PeraPeraPaper)で聞くと、間違いに気づく。

ラビッシュ → ラディッシュ クリーム → クリーム と → を

・8月に書いた文から

「昨日、僕がお祭りでかたおきをやりました。かたおきは難しかったです。クレープを食べました。チョコについたクレープ



プーがおいしかったです。やきとりを食べました。やきとりは、やわらかくて、おいしかったです。タピオカを飲みました。タピオカがおいしかったです。またお祭りに行きたいです。」

間違いの修正

①自分で文章を声に出して読んで、間違いに気づいた。

かたむき → かたぬき クレプー → クレーブ

(4)【間違いの修正】～変化の要因

夏休み前までは、自分で書いた文章をアプリに入力し、音声として聞かなければ間違いに気づくことはできなかった。夏休み明けに取り組んだところ、自分の書いた文章を自分で読むと間違いに気づき、修正することができた。また、文が長くなると、途中で音声として聞いて確認するなど、自分なりの工夫が見られた。

自分の書いた文章を目で見ただけでは間違いに気づくことは難しいが、声に出して読むことで間違いに気づくことや、声に出しながら言葉を書くことで間違いが減ることを知り、生徒は書くことに自信をつけることができた。

活動の具体的内容【話す場面の改善】～質問を理解する・質問を可視化する

(1)活動がターゲットとする目標

・整理したことを元に、定型を活かして人の前で話すことができるようになる。

(2)具体的な内容

①生徒が書いた文章を先生や仲間の前で読む。

②文章の内容に対して質問をしてもらい、それに答える。

③質問の内容がわからないときには、質問を文字化して可視化できるように、アプリ(Google 翻訳)を使う。

④可視化しても答えられない質問が出たときに、質問の考え方の学習をする。

・可視化した質問を見て、言葉を文節に分け、何を聞かれているのかをわかりやすくする。

・質問で聞かれていることを理解し、そこからキーワードについて考える。この時、必要に応じてマインドマップなどを作成し、言葉からイメージを連想させる。

・質問に対する最終的な答えを見つけ出し、言葉にする。



対象児の事後の変化【話す場面の改善】～質問を理解する・質問を可視化する

(1)学習当初の様子

・夏休み明けの8月から自分で書いた文章を見て、先生や仲間の前で話す活動を始めた。

・話した後に、先生や仲間からの質問に答える活動を行った。

→ 実体験のあることや、これまでに質問されたことに対しては、答えることができる。

→ 質問するときの会話が長くなると、考えることが難しくなる時がある。

→ 実体験のないことや実体験があっても抽象的なこと(なぜ、どうして、どんな、どのようになど)、これまでに質問されたことがないことに対しては、答えることができない。

・生徒の困り感(実際の生徒との話から)

①質問されていることが、文字として目で確認できたほうが答えやすい。

②質問に答えられないときには、頭の中がグルグルする。グルグルしているときに、パッとひらめくときがある。

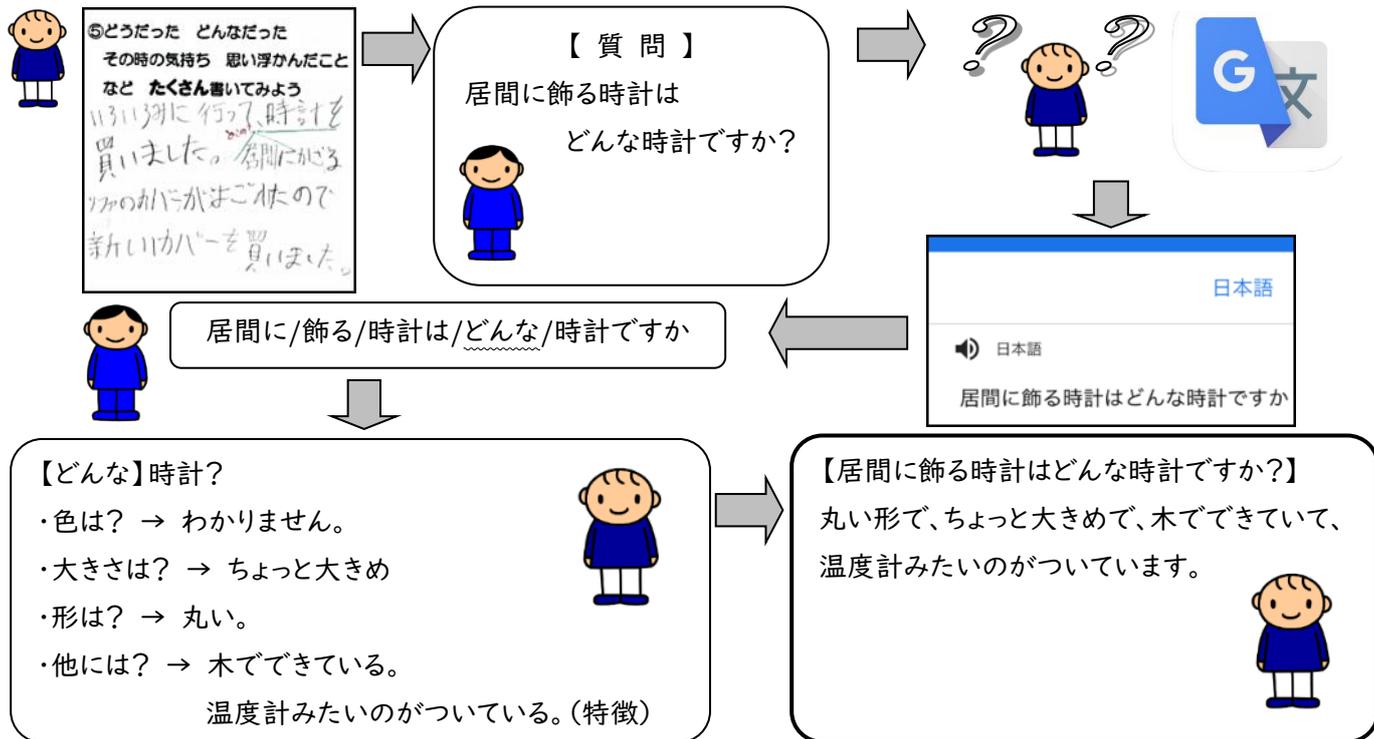
③質問に対して、どうやって考えて答えればいいのかかわからない。

(2)9月以降の取り組み～Google 翻訳を活用しての変化

・答えることができない質問をされたときに、Google 翻訳を活用し、質問内容を文字化するようにした。

①文字化することですぐに答えることができる質問と、すぐに答えることができない質問がある。答えることができない質問に対して、キーワードを取り上げ、生徒とともにマインドマップを作ってみたものの、キーワードからイメージを膨らませることはできなかった。

②質問で何を聞かれているのかを焦点化するために、文字化した質問文を文節に区切って考えることにした
この取り組みから見てきたことは、「どんな」「どのように」といった抽象的な言葉が質問に含まれていると、どのように考えていいのかがわからなくなるという傾向だった。そこで、このような言葉が出てきたときの考え方を学習した。



このように、質問に抽象的な言葉が含まれているときには、質問を文字化し、何を聞かれているのかを明確にし、質問への答え方を継続して学習した。

(3) 生徒の変化

・Google 翻訳の活用場面の变化

①9月から1月にかけて、Google 翻訳の活用場面は明らかに減っている。

→ 抽象的な言葉が含まれる質問に対して、どのように答えればいいのかわかるようになってきた。11月頃になると、アプリを一度も使わずにすべての質問に答えることができる場面が増えてきた。

②11月 対象生徒が文章を読んだ後の同級生・教師と対象生徒とのやり取り

質問者	質問内容	対象生徒の答え
同級生	大高酵素って何ですか？場所ですか？	袋に入っている黄色い土です。これを使いました。
教師	鶏糞はどんなにおいでしたか？	ちょっと臭いにおいでした。
同級生	みなぼっけて、何をするとところですか？	子どもたちが遊ぶところです。
教師	耕運機は何のために使うんですか	土をほぐすために使います。
同級生	3回引っ張ってエンジンがかかった時、どう思いましたか？	ちょっとびっくりしました。
教師	なぜ、びっくりしたんですか？	音が大きくてびっくりしました。
教師	どんな音でしたか？	ポンっという音がしました。
同級生	「僕はへたくそだったけど楽しかったです。」と書いてあるけど、どんなところがへただなと感じたんですか？	機械で土をほぐすのがへただなと感じました。
教師	耕運機ってどれくらいのスピードで動くんですか？	素早く動きます。

【報告者の気づきとエビデンス】

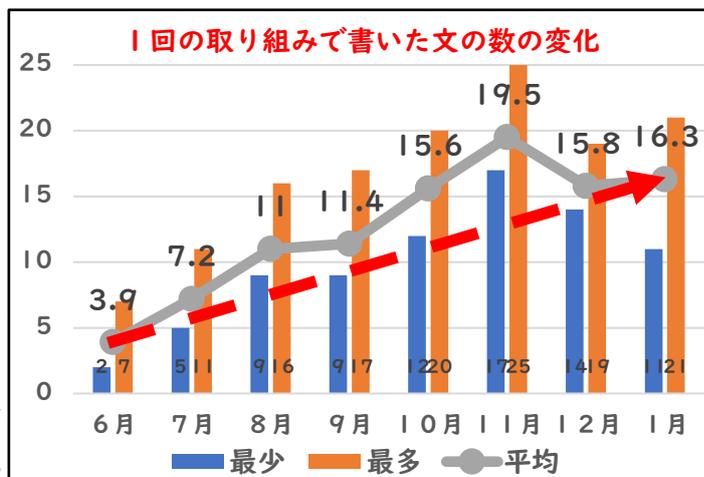
(1) 主観的気づき

- ・1枚の紙に定型を用いて自分の体験や気持ちを書く学習を繰り返すことで、自分のことをたくさん伝えていいと思うようになったのではないかな。
- ・「紙に書く→話す→質問に答える」という一連の活動ができるようになり、人と関わる自信につながったのではないかな。

(2) エビデンス

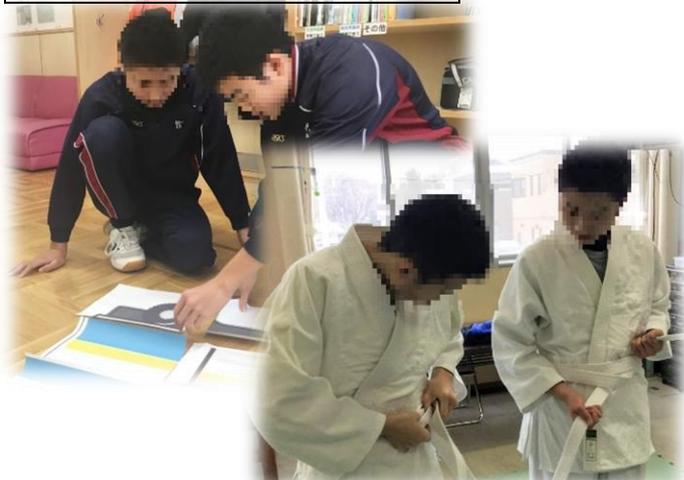
- ・文の数の変化と間違いの修正方法の変化

6月から1月にかけての継続的な取り組みの結果、1回の取り組みで書いた文の数の変化を見ると、平均値にはばらつきはあるものの、全体的にみると文の数は増加傾向にある。また、言葉、促音、長音、助詞の間違いの修正方法は下の表のように変化した。自分でたくさん文章を書くことができる体験や、間違いを自分で修正することができる体験を通して、表現することに自信をもつことができたと考えられる。



↓ 同級生からやり方を教えてもらう様子

修正方法	6月	7月	8月以降
①自分の書いた文章を見る	修正できない		
②自分の書いた文章を自分で声に出して読む	修正できない	修正できる	
③音声読み上げアプリで聞く	修正できる		



同級生に帯の締め方を教える様子 ↑

(3) エピソード

- ・生徒の変化(普段の様子から)

①生徒から会話をすることが多くなった。

同じ学級にもう1人男子の同級生がいる。小学生の時からあまり仲が良くなく、これまで2人で会話をすることはほとんどなかった。しかし、9月頃から生徒から同級生に話しかける姿を見かけるようになった。生徒に聞いたところ、「自分から話してみよう」という気持ちになり、10月以降は頻繁に2人で話すようになった。その姿を見かけた教員が驚くほどの変化だった。また、私を含めた教員に対しても生徒から会話をすることが多くなった。会話のきっかけは、生徒からの質問であることが多い。3学期になると、同級生と会話する姿はほぼ毎日見られるようになり、双方向でのやりとりが可能となった。

②「わからない」ことを自分で「わからない」と伝えることが多くなった。

この取り組みを始めた当初、生徒は自分から言葉で「わからない」ということを伝えることができなかった。10月ころから、日常生活や学習の場面で生徒から「わからない」と伝えてくることが多くなった。この変化の要因として、【何がわからないのかを理解することができ、それを言葉で伝えることができるようになった】ことが挙げられる。数学の授業の時、これまでだと教師が生徒に「何がわからない?」と聞いても返答できなかったが、今では同じ質問をすると生徒がその時に考えていたことを言うことができるようになっている。Google 翻訳を活用し、質問の受け答えの学習を積み重ねた成果であると考えている。